

2024年度  
活動報告書



一般社団法人 torindo

## <とつとつダンス> 2024年度活動報告書

### 目次

- P.1 ダンスが立ち上がるとき
- P.2 海外での取り組み
- P.4 シンガポール渡航期間中の活動記録
- P.6 マレーシア渡航期間中の活動記録
- P.8 鼎談<とつとつダンス>を映像でみる(遠藤幹大、久保田テツ、砂連尾理)
- P.10 <とつとつダンス> 2024 in 鹿児島
- P.11 LLさねかた・あんまあの家 インタビュー
- P.13 関東での<とつとつダンス>ワークショップ
- P.14 パフォーマンス公演 in 大阪
- P.15 2024年度<とつとつダンス>活動記録上映&トーク
- P.16 それぞれの視点からみた<とつとつダンス>  
(1) エッセイ「制約のない自由な方法でつながる」(ホイリン・タン博士)
- P.17 (2) エッセイ 大阪舞台公演から持ち帰ったこと  
——触れられる体と特徴的な身体で舞台にあがること(石田智哉)
- P.18 (3) 鼎談<とつとつダンス>ワークショップとパフォーマンスに参加して  
(神村 恵、西岡樹里、大迫健司)
- P.21 (4) エッセイ<とつとつダンス>雑感(西川勝)
- P.22 終わりに

## ダンスが立ち上がるとき

つい先日<とつとつダンス>の古い映像を見返す機会があった。なんとなく音を消してみた。

2009年。無音の世界で、15年前の若い砂連尾理がするどい目つきをして、高齢の女性・谷口さんと二人の小学生に振付をしている。舞鶴市の特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるのホール。行きかう入居者や職員を背景に、小学生二人が自分たちの背中に谷口さんが指で書いた文字を必死に探っている。だんだん小学生たちが飽きていくのが表情からわかる。それでも、眉間に皺をよせた砂連尾は三人に「背中文字当てクイズ」を繰り返させる。不満あふれる小学生たちの顔とは対照的に、谷口さんは毎回真剣に指で文字を書く。

それは2010年に上演したダンス公演『とつとつダンス』の稽古風景。その後15年続いていく<とつとつダンス>の営みの中で、認知症の高齢者が舞台に出演したのはこの時が初めてで、今のところ最後だ。本報告書に文章を寄せていただいた臨床哲学者の西川勝がいろんなところで繰り返し述べているように、赤ちゃん人形に話しかけ続ける重度の認知症高齢者のみゆきさんと砂連尾との絡みが特に印象的な舞台で、砂連尾と彼女のダンスは<とつとつダンス>を象徴するものになった。でも、そこに谷口さんがいたことをぼくらはあまり話題にできていない。

初期の<とつとつダンス>ワークショップの記録を見返してみると、ほぼ毎回、谷口さんが熱心に砂連尾のワークショップに参加し、ダンスをしているのがわかる。その表情はいつも真剣だった。

彼女は、軽度の認知症で、とはいえ耳が遠く、砂連尾の指示が毎回あまり理解できない。プライドが高い谷口さんは「わからない」が素直にいえなかった。そのせいで不自然な行動が多くなる谷口さんに介護職員たちは手を焼いていたように思う。そんな谷口さんもワークショップ中は、おだやかで、彼女の熱心さにぼくらは救われていた。

彼女が毎回参加してくれていたのは、たぶん「わからなくても」よいワークショップだったからだと思う。ぼくらが「わかっている」ことを前提に組み立てられた社会で生きているとして、認知症になっていくとおそらくそのあたりがあやふやになっていく。自分が「わかっていない」ことに周囲が苛立つのを目の当たりにして、困惑し、自身も苛立っていく。

2009年のある日、砂連尾とぼくは、一緒に踊ってくれる人を求めて、二人でグレイスヴィルまいづるをさまよっていた。ホールの喧騒の中、一人静かに座っていた谷口さんに砂連尾が話しかける。耳が遠いのでうまく会話が成立しない。そのうち(どういうきっかけかは覚えていないが)、谷口さんの前で砂連尾が真剣に独りで踊りはじめた。あんなに熱心に踊る砂連尾をみたのは初めてだった。最初は戸惑っていた谷口さんだったが、だんだん真剣な顔に変わっていく。二人のチューニングが合っていたのだと思う。谷口さんは動いていないのに、喧騒の中に、二人のダンスが立ち上がっていった。今でもぼくは無音の映像のように鮮明に思い出すことができる。あの時からぼくの中で<とつとつダンス>がはじまった気もする。

谷口さんもみゆきさんもお亡くなりになったが、<とつとつダンス>という営みは今年度も継続し、マレーシア、シンガポール、鹿児島とワークショップを続けることができた。その過程で何回かダンスが立ち上がった瞬間がある。ドキュメントでもあり、かつフィクションでもあり、誰のものでもない、時間を超越したダンス。現時点でのぼくらはそれを<とつとつダンス>と名付けるしか術をもたない。今年度はダンス公演や活動記録を上演する形で、そのダンスを多くの観客、何より参加してくれたダンサーたちと共有できた。それは大きな成果だと考えている。

---

豊平 豪 (一般社団法人 torindo 代表理事)

## 海外での取り組み

2009年に特別養護老人ホームからスタートした<とつとつダンス>。コロナ禍の2020年にオンライン化したことをきっかけに、距離の壁、言語の壁を超えるワークショップ(以下、WS)として、マレーシア、シンガポールへと活動を広げた。2023年には、<とつとつダンス>を「伝える」ことに重きを置きながら、各WSやレクチャーを実施。2024年にはテーマを「育てる」ことへと発展させ、シンガポールのアーティストとともに体験を重ねた。ここでは、現在までに実施した海外での事例を一覧で振り返る。

### ● 2020年

5月 <とつとつダンス>オンラインWSがはじまる。

11月 マレーシアのサウンドアーティストを迎えて、  
シンポジウム「<とつとつダンス>オンライントーク・セッション  
——認知症高齢者とのダンス・音楽によるコミュニケーションの可能性——」開催

### ● 2022年

8月 マレーシアと日本をオンラインで繋ぎ、トークセッション、WSを実施。  
以降12月の渡航まで、毎月1回全5回のオンラインWSを開催。

12月24日 マレーシア渡航①  
～2023年1月3日 セシリア・チャン(老齡学者)のコーディネートで、渡航期間中に、  
高齢者ケアセンターでの公開型ダンスWS、  
芸術学部の学生に向けた講義、バガン病院でのレクチャーを実施した。  
「IPOH HEALING ARTS FESTIVAL」にも参加。

### ● 2023年

2月21日 海外受け入れチーム来日①  
～2月26日 2022年度活動報告会に合わせて海外受け入れチームが来日。  
日本の認知症介護における事例視察として、  
複数の特徴ある福祉施設を訪問した。

7月31日 マレーシア渡航②  
～8月6日 渡航期間中に、大学でWSとレクチャーを実施。  
バガン病院でWS、高齢者ケアセンターで2日間の滞在制作を行い、  
マレーシア在住アーティストを集めてWSを行った。  
現地の現代美術家オクイ・ララがほぼ全行程に同行。

8月6日 シンガポール渡航①  
～8月11日 ディメンシア・シンガポール協力のもと、オードリー・ペレラ  
(アートフェスティバルプロデューサー兼ライター)をプログラム・マネージャーに迎え、  
認知症高齢者に向けた3日間のWS、高齢者クラブでのWSを行った。

9月6日 シンガポール渡航②  
～9月10日 シンガポール在住アーティストに向けたWSを開催。  
ディメンシア・シンガポールが主催する認知症啓発イベントに参加した。

11月30日 海外受け入れチーム来日②  
～12月5日 2023年度活動報告会に合わせて、海外受け入れチームが来日。  
トークやパフォーマンスに参加した。

● 2024年

7月21日 シンガポールとのオンライン・ワークショップ  
オードリーから推薦を受けたシンガポール在住の若手アーティストとともに、  
オンラインWSを実施。

8月11日 シンガポール渡航③  
～8月19日 在住アーティストに向けてレクチャーとWSを実施した後、彼らとともに  
通所施設での3日間のWS、フィードバック・セッションを行った。

● 2025年

1月3日 マレーシア渡航③  
～1月8日 認知症者の家族に向けたリトリート・プログラムの一環としてWSを実施。  
また、在マレーシア日本人に向けたWS、バガン病院でのWSと  
レクチャーも開催した。

1月23日 海外受け入れチーム来日③  
～1月26日 大阪での<とつとつダンス>パフォーマンス公演に合わせて、  
在シンガポールのアーティスト、マイケル・チェンが来日。

2月16日 東京での<とつとつダンス>記録映像上映会&トークに、  
マイケル・チェン、セシリア・チャンがオンラインで登壇。



1・コロナ禍で実施したオンラインWS  
2・認知症啓発イベントに参加(2023)  
3・2023年度活動報告会に海外受け入れチームが参加

写真3 撮影:西野正将

# シンガポール渡航期間中の活動記録

2024年夏、砂連尾理・神村恵をはじめとする日本チームがシンガポールに渡航。<とつとつダンス>のエッセンスをシンガポールのアーティストへと伝え、学び合うことを目的に、高齢者施設でのワークショップ(以下、WS)を行った。ここでは、プログラムに参加したシンガポール在住アーティストたちの声とともに、各日程での活動を紹介する。

## ● 参加アーティスト



ジェイミー・ブイテラー  
Jamie Buitelaar  
パフォーマー。  
若年性認知症の当事者団体  
ディメンシア&コーに所属し、  
応用演劇を専攻している。



アリソン・タン・ユーヤング  
Ellison Tan Yuyang  
バベット歌劇パフォーマー、  
役者。



マイケル・チェン  
Michael Cheng  
俳優。障害者や  
認知症者を対象にした  
アートプログラムを実践。



キンバリー・ロング  
Kimberly Long  
ダンサー・振付家。  
シンガポールのコンテンポラリー  
ダンスグループに所属。



クリシュナ・ガンパティ  
Krishna Ganapathi  
科学の教師であり芝居・ダンスなどの  
パフォーマーでホスピタル・  
クラウンの経験もある。

## 1 アーティスト向けレクチャー型WS

日時 2024年8月12日

場所 アプサラス・アーツ(グッドマン・アーツセンター内)

イントロダクションでは、<とつとつダンス>のこれまでのを紹介した後、互いに自己紹介。その後、「呼吸を合わせる」「距離を測る」「目を合わせる」「触れる」というキーワードでWSを実施した。すぐに空気を掴んでいく様子はパフォーマンス経験のある彼らならではの。終了後も活発な意見交換が行われた。

## 2 高齢者施設での3日間のWS

日時 2024年8月13日～15日

場所 アクティブ・エイジック・ケア・センター  
[運営: Thye Hua Kwan (THK)]

認知症者と介護者らとともに、アーティスト5名(マイケル、アリソン、クリシュナ、ジェイミー、キンバリー)を加えた<とつとつダンス>チームで、3日間のWSを行った。THKの利用者に加えて昨年の渡航でもお世話になったディメンシア・シンガポールの利用者やディメンシア&コーのメンバーと、それぞれのご家族や介護者など連日10～12組が参加。1日目は「目を合わせる」「触れる」などのセッション。2日目は、チーム毎に一枚の絵を描き、タイトルをつけて各アーティストが即興パフォーマンスを披露した。さらに3日目には、身近な日用品をパーカッションに見立てて演奏する「なんちゃってガムラン」などを展開。最初は硬い雰囲気だったアーティストも少しずつ空気に慣れていき、奇妙で賑やかなセッションとなった。



### 3 フィードバック

日時 2024年8月18日

場所 アリワイ・アーツ・センター

最後のWSでは、クリシュナ、ジェイミー、キンバリー、マイケルとともに3日間のワークを振り返った。砂連尾が3日間のワークを通して目指したのは「関係性を超えたところで自由になること」。教える・学ぶという関係性を取り払い、お互いに対等でフラットな関係になってこそ、「そこに一番自分が存在していきたい場所がある」と砂連尾。フィードバックの後半では、〈とつとつダンス〉の新しいWSのアイデアを発表し合った。



#### ●インタビュー

・今回のプログラムでは、言葉にすることが難しい経験を伝えることができたと思う。いろんなことを経験したり試してみる自由があるということは、ダンスにとどまらず人と仕事をしたり、誰かと一緒に過ごす中でも使える哲学になるのではないかな。一方で、他人にそれをどのように説明できるかというのが少し難しい。（マイケル・チェン）



・ゴールに向かおうとしないということそのものが〈とつとつダンス〉の最大のメリットだと思う。患者に施される多くの治療には決まった目的があるけれど、特に認知症の人に対してはやってみないとわからないと言われることも多く、結果に直結する治療一色になってしまうのは良くない。〈とつとつダンス〉のように、決まっていない治療（経験）ができれば、患者にとってもバランスが取れると思う。（ジェイミー・ブイテラー）

・〈とつとつダンス〉は自由があるからこそ好き。自分にはシアターのバックグラウンドがあるので、同じものを見ていても、インプロビゼーションダンスの視点とは捉え方が変わってくる。それを強みとして、テトリスっぽく（結果を求めて）取り組むのか、インプロダンスっぽく取り組むのか、自身の強みをどうやって生かすことができるのかを考える。今回のプログラムを、色々な参加者に向けて変えていくこともできると思う。（クリシュナ・ガンパティ）

・この過程そのものが成果だとも言える。他者との内面での結びつきを作ることができることと、感情をリリースすることができること。シンガポールにはあまりないテクニックだと思う。シンガポールでは結果を求められることが本当に多い。ただ、結果に固執せず、プロセスを結果と思ってこのテクニックを応用して、どう自分のダンスの動きにより深く、強く応用できるのかを考えている。（キンバリー・ロング）

## マレーシア渡航期間中の活動記録

2025年の年明け、砂連尾理・神村恵をはじめとする日本チームがマレーシアに渡航。「リトリート」プログラムへの参加、マレーシアに移住した日本人の方々に向けたワークショップ(以下、WS)、医療関係者へ向けたWS&レクチャーと、ペナン周辺における認知症の捉えられ方を俯瞰しながら、現場に向き合う方々と直接顔を合わせる機会になった。ここでは、現地コーディネーターを務めるセシリア・チャンの声とともに、各プログラムの概要を紹介する。

### 1 認知症者とそのケア パートナーとの2日間のWS

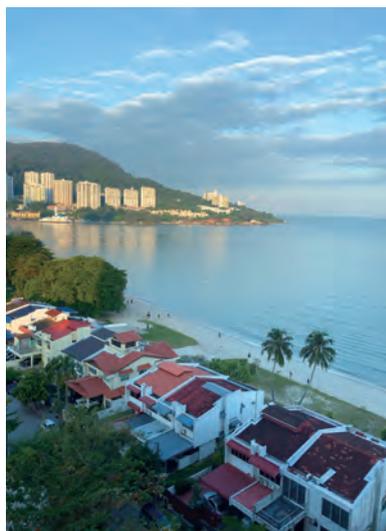
日時 2025年1月4日～5日

場所 フラミンゴ・ホテル(ペナン)

参加 認知症者・高齢者とそのケアパートナーら25名



バガン病院の高齢者ケアセンターが主催するリトリートプログラムの一環として、〈とつとつダンス〉WSを実施した。リトリートとは住み慣れた土地を離れて心身を癒し、それぞれが自分自身やそれを取り巻く環境を見つめ直す時間を持つこと。リゾートホテルを会場にWSを実施し、普段とは異なる環境で、ゆったりとした気持ちで参加された方も多かった。



### 2 ペナン在住の日本人に向けたWS

日時 2025年1月6日

場所 ココナッツ・クラブ(ペナン)

参加者 40代から80代までのペナンに住む日本人12名

マレーシア政府では2002年より、定年退職者を主な対象にした長期滞在ビザ「マレーシア・マイ・セカンドホーム(MM2H)プログラム」を発行している。現地で日本人向けのサポートプログラムを行うココナッツクラブの「〈とつとつダンス〉を通して移住者同士が交流してもらえれば」との思いを受け、MM2H利用者を対象にしたWSを実施した。

終了後は参加者同士も少し打ち解けた様子で、残って話をする人たちの姿が見られた。

### 3 バガン病院での 医療関係者に向けたWS

日時 2025年1月7日

場所 バガン病院(バターワース)

参加者 認知症者やその家族、医療・介護スタッフら40名

バガン病院でのWS&レクチャーは、今回で3度目となる。会場には先日のリトリート参加者等の姿もあり、その約3分の1が「すでに<とつとつダンス>を知っている」とのこと。参加者が多く限られた時間ではあったが、会場からは「相手は何を話しているのか、内容がわからなくてもハッピーな気持ちになった」「ノンバーバル・コミュニケーションでは、ゲームのようにワークしているうちに患者の方も気が付いたら身体を動かしていることになる」など、ポジティブな感想が数多く寄せられた。



#### ● 現地コーディネーターの声

認知症患者の現場から ～活動3年目を迎えて～

<とつとつダンス>との始まり

マレーシアでは今のところ、認知症は病気やスティグマの烙印を押されてしまっています。言語能力が失われることもあり、そうなると家であれ施設であれ放っておかれてしまう。そして介護者にも孤独感が溜まって…。ただ、一方で認知症の人も人との繋がりを求めています。結果的に介護者と認知症の人、双方にフラストレーションが溜まり、不幸な状態に陥ってしまっているわけです。

そのような状況を背景に<とつとつダンス>との活動を始め、当初はマレーシアの方たちはなぜこの<とつとつダンス>が認知症に役立つのか、混乱してる人がほとんどでした。個人的な変化のきっかけは、砂連尾さんが私が勤めるケアセンターで認知症の人と踊った時です。それまでその方が踊るということは一切なかったので、家族も私も本当に驚いてしまっ。もちろん砂連尾さんは中国語を話せないし、その方も日本語は話せない。それでもそこに繋がりが生まれ、通じていたんです。非常に印象的でした。

その場にいるということが大事

マレーシアでの活動は3年目となりました。我々はこの間の経験を踏まえ、現場でも、特に進行が進んだ認知症の人との繋がりを構築する道具のひとつとして、この<とつとつ>のコンセプトを取り入れています。

具体的には、患者がボディランゲージで何か仕草をしたり、ちょっと違う声を発した場合に、治療的に、それと似たような形で返事をしたりしています。もう考えなくても自動的にそうしているんです。その背景には、<とつとつダンス

>では直ちにその効果が見え、みんな一緒に楽しい雰囲気になれることがあります。そのことで認知症の人たちの態度もプラスの方向に大きく変わる実感があります。

今年は、マレーシアで初めて行ったリトリートという取り組みのひとつとして、<とつとつダンス>をプログラムに入れました。マレーシアではどうしても認知症の人は家または施設に鍵をして閉じ込めておくというイメージがあるんですね。

外に連れ出さないのは周りの人の目を気にしたり、認知症の人も混乱して怒ったり、迷子になってしまうんじゃないかという心配があるからです。ただそうすると認知症の人と一緒に生活している人たちは息抜きもできない。ですから彼らにもストレスを発散し、他の家族や介護者たちと話をして、自分一人で抱えている問題ではないんだと気付いてもらいたかったんです。

リトリートで行った<とつとつダンス>では、私もその場にいることを楽しみました。私自身も、<とつとつダンス>を通してより遊び心を持ち、目の前の相手と接するようになったことを自覚しています。間違っているかどうか、正しいかどうかは一切関係なく、その場にいるということが大事だということに気づいたので。

これまでの3年間のWSや交流のおかげで、医療関係従事者の間では、ようやくこのようなクリエイティブな活動が認知症の人とのつながりの構築、ケアに役立つということが、理解されつつあります。おかげさまで、<とつとつダンス>はマレーシアで認知症患者との世界に種をまき、今ようやくそれが芽生え始めている。そんな風に感じています。

セシリア・チャン(老年学者・コーディネーター)

## <とつとつダンス>を映像でみる

<とつとつダンス>では、2022年から映画監督や映像作家も加わり、活動を映像を通して丁寧に記録してきた。今年度は、2009年度から<とつとつダンス>に関わっている久保田テツ(映像作家)、2024年度から関わり始めた遠藤幹大(映画監督)の両氏に撮影・編集を依頼。<とつとつダンス>を映像で見たときに何が見えてくるのか。砂連尾理も含めた鼎談を行った。

**砂連尾** 久保田さんは最初期から<とつとつダンス>の映像を折々で撮ってもらっていますが、遠藤さんは映像記録としては今年度初めての参加で、鹿児島での活動に同行してもらいましたね。

**遠藤** 僕が行ったのはダイケアサービスのLLさねかたとホームホスピスのあんまあの家です。前者は大勢の利用者と対峙する空間、後者のご夫婦が中心となって営まれている小規模な施設で一人ひとりと密接なワークショップができる空間。タイプがだいぶ違う。どうしたもんかな、と思って、撮ったものを見返したときに、あんまあの家で「すごく撮れてるな」と思えるカットがありました。これを取っかかりに一つ映像作品ができないかなと思うようになりました。

**久保田** 僕が参加したマレーシア、シンガポールの活動では、たくさんの方が施設に来ているところに、砂連尾さんと神村さんが順番に回っていくような状況を記録するかたちで、撮影はなかなか大変でした。だから遠藤さんのあんまあの家での映像を見たときに、物理的にもそんなに広くないところで、どちらかという個と砂連尾さんの関係性を撮れるのはうらやましいなと思いました。

**遠藤** 僕の方も、LLさねかたでは大勢の中に砂連尾さんが働きかけている感じでした。そういう意味では、久保田さんの映像を初めて拝見して同じような気苦労を感じましたね。砂連尾さんにとって、一人を対象にするワークと大人数とするワークの違いはありますか？

**砂連尾** 一對一のときは「待つ」感じですね。もちろん相手に触れようとはするんですけど、触れていくことだけをしていない。常に相手と同じ呼吸をしながら相手からのアクションを待っています。一方で、大勢を相手にするときは、場がかなり雑然としているので、こちらから最初に積極的なアクションをしていくアプローチにはなってきます。そういう場だと、お二人ともかなり寄って撮影してましたね。

**久保田** 待てる／待てないがすごく大きいかもしれないです。「みゆきさん」を撮ったときはもう待つしなくて、だからもうまさに「記録」であり、見ているだけのカメラでしたが、シンガポールとマレーシアに関しては能動的に記録する感じでした。

**砂連尾** お二人はどんなことを感じながら撮りましたか？

**久保田** 2013年に撮影した重度の認知症高齢女性のみゆきさんと砂連尾さんのダンスをずっと引きずっているんです。二人だけのコミュニケーションが50分続く映像で、とにかく美しかった。その中で、例えば、みゆきさんのそばで、砂連尾さんが寝そべったまま顔を近づけるシーンがあります。彼女はじっと砂連尾さんを見つめて頬っぺたを撫でたりします。背景は全く分からないけど、少なくともそういう「撫でる」という身体の動きを砂連尾さんが導きだしている事実だけがそこにあります。<とつとつダンス>を記録していると随所にそういうシーンがあるんです。何か身体が導かれていくシーンの瞬間、瞬間の連なり。とにかく僕はその一点で<とつとつダンス>を記録したいといつも

思っています。

シンガポールとマレーシアでは集団性の中で場そのものをとにかく記録していったんですが、人と戯れるところを自由に撮ることとは明らかに違うなと痛感しました。もちろん、ここにいない人に伝えていくためにはむしろそういうバランス感覚は大事なんです。



左から、豊平(進行)、久保田、砂連尾、遠藤

遠藤 最初に目論見をもって映像が撮れないので、今のところは何かの固まりを作ってる感じです。それと、あんまあの家にしても、LLさねかたにしても、利用者とワークショップができる時間は限られています。これまでの記録映像は編集されていたこともあって、僕には時間感覚がわかっていなかった。だから、現場で一番驚いたのは本当に限られた時間の中で何か出来事を起こす、砂連尾さんのなんというか「打率の高さ」でしたね。たとえば、「あんまあの家」の砂連尾さんと一緒に踊られた女性がいろいろと思い出したようにお話をされていたのですが、それが事実かどうかはわからないし、もしかして墓場まで持っていくつもりだった秘密を思わず話してしまったのかもしれない。本当のところは分かりませんが、それは砂連尾さんとその瞬間に生み出した、誰のものでもない「記憶みたいな『何か』」です。そして、それ故に見る側が私事として出来事そのものを観ることができる。僕はそういう瞬間を撮ることが大事だなと思っています。それはなかなか撮ろうと意図して撮れるものではないんです。でも砂連尾さんの近くにいると「何か」が撮れる。それは僕としてはモチベーションになる気がします。

久保田 <とつとつダンス>で起こった出来事は多くの謎を常に残しています。なぜ彼はそこに足を重ねたのか、なぜみゆきさんは砂連尾さんの顔をなでたのか。僕がいつもグックるところってそういう得体の知れないところ。<とつとつダンス>にはそれがあちらこちらにある。「なぜ」は全部こっちに委ねられていて、向こうは別にその答えをこっちに出してはくれません。それでもやっぱり接触がそこにあり、何なら向こうもちゃんと手を差し伸べてくれる。この関係性だけが僕らに突きつけられている。日常生活において、人に触れるって結構大変なことで「触れる」ことに常に意味を表明しなとなかなか触れられない。だから必死に意味を自分の中で探したり、相手に説明したりします。まったくそれが無い中で人と触れ合って、しかも無表情で足を差し出してくる相手と自分の足を重ね合わせる行為自体やはり、ショッキングだし、謎です。それが本当に<とつとつダンス>のおもしろいところだと思うんです。

## <とつとつダンス> 2024 in 鹿児島

昨年度に続き今年度も、<とつとつダンス>チーム一行は鹿児島を訪問。今回は砂連尾と神村に加え、新たに加わった西岡樹里(ダンサー)も同行し、2つの施設で通所者や入居者と時間を過ごした。また妙行寺ではパフォーマンス+ワークショップ体験および、高瀬比左子氏(<未来をつくる介護カフェ>代表)を迎えたトーク・セッションを実施した。

### 滞在制作

日時 2024年10月31日(木) ~ 11月2日(土)

会場 LLさねかた、あんなまの家

デイサービス施設「LLさねかた」では、いつでもできるように「さねかた体操」を利用者とともに創作した。また、ホームホスピス「あんなまの家」では、夕方の時間帯から夕食後まで滞在。後者では、二人の入居者と時間を共にした。じっくりと時間をかけて傍にすることで、各々の持っている動きが「ダンス」として展開されるさまを目撃することとなった。



### パフォーマンス+ワークショップ 体験&トーク・セッション

日時 11月2日(土) 18:30 ~ 21:00

会場: 妙行寺 門徒会館

ゲスト: 高瀬比左子 (<未来をつくる介護カフェ>代表)

参加人数: 45名

妙行寺では、昨年公演したワーク・イン・プログレスのダイジェスト版を上演。その後、パフォーマンスのエッセンスをいくつか参加者に体験してもらった。またトーク・セッションではゲストに高瀬比左子氏を招き、<とつとつダンス>をどのように日々の介護にいかせるかについて、グループごとにディスカッションを行った。



#### ●ワークショップ参加者アンケートより

- ・普段は呼び起こされないような感覚を覚え新鮮だった。待つこと、ゆっくりすることも大事だと再認識できた。(福祉関係者)
- ・様々な仕事・立場の方々と話すことができた。大事だなと思えることを共有できる人たちとの出会いは、自分の励みにもなった。また参加したい。(医者)

## LLさねかた・あんまあの家 インタビュー

鹿児島ではタイプの異なる二つの施設でワークショップを行った。今回は一問一答形式でそれぞれの施設の魅力と今年度の<とつとつダンス>の活動について伺った。

### ● 回答者

渡辺 智之 (LLさねかた 管理者・介護福祉士)

1 ● LLさねかたは  
通所型デイサービスです。  
どのような施設ですか？

高齢者を受け入れると施設ではリスクマネジメントを考えるとできなくなることが多くなってきます。その中で、LLさねかたは出来る限り能力を生かしてもらう<活躍系デイサービス>を目指しています。たとえば、のこぎりなどの工具とか日曜大工道具を使って一緒に作業してもらったり、包丁をにぎって料理や配膳を手伝ってもらったり。このあたりは通常の施設では危険性や衛生面でなかなかできない部分ですが、LLさねかたではそこにトライしています。

2 ● 今回<とつとつダンス>から  
三人のダンサーを受け入れて  
いただきましたが、  
どのように感じましたか？

最初はどんなものかわからず、利用者さんが受け入れられることができるのか不安もありました。ですが、言語的ではないコミュニケーションを用い語りかけるやり方を通して、徐々に受け入れられていたように思います。今までにない利用者さんの姿がみえてきて、私自身も大変興味深かったです。

3 ● <とつとつダンス>から  
何か得るものがありましたか？

自分たちは表現者ではないので、利用者さんの動きに対して常に受け手として対応する(ケア

する)ことになります。ですが、ダンサーの皆さんが動きの中で利用者さんに語りかけ、表情やアクションを引き出していました。それによって、普段は気付かない利用者さんの側面を見ることができたと思います。受け身だけではないケアの可能性に気づくことができました。

### ● 回答者

山下 初枝

(NPO法人ホームホスピス ゆいたばあー  
「あんまあの家」理事長)

1 ● 「あんまあの家」はホームホスピスです。  
どのような施設でしょうか？

一般的に、ホスピスのイメージとして、癌の末期や病気で余命が少ない方が最期を迎えるところ、とイメージしがちですね。あんまあの家は、子供から大人まで、家で暮らしたいけれど、認知症や病気などで介護が必要になった方々が、家ではないけれどもう一つの家として、お互いに支え合って<共暮らし>をしながら、人生の最期を迎えるところだと思っています。あんまあの家はオープンして2年目ですが、ここには、生まれたばかりの赤ちゃんから、余命宣告をされた方など、色々な人達が来られます。将来、ここが色々な人たちの(障害のある方、小さな子どもたち、認知症のある方、介護が必要な方など)の交流の場所になれば、と思っています。

2 ● 今回三人のダンサーを  
受け入れていただきましたが、  
どのように感じましたか？

素敵なチームだと思いました。色々な方とご縁

を作る役割の制作の皆さん、出会った方々から、新しいダンスを生み出す砂連尾さん、その砂連尾さんのダンスに魅かれ、ご自分のダンスでアプローチしている西岡さん、神村さん。それぞれの感性を活かしながら、これからも素敵な作品が出来るんじゃないかと思います。

---

3 ● <とつとつダンス>が活動したことで何か得るものがありましたか？

---

仕事柄、自分の想いを伝えることの難しい方々への接し方について考える時間になりました。指先を使ったり、そばに寄り添って同じ空気感で時間を過ごすだけでも、コミュニケーションが取れることに気づきました。

---

4 ●ダンサーたちと時を過ごしたヒロコさんとノリコさんのお加減はいかがですか？彼女たちはどう感じた？山下さんは思われますか？

---

裁判所勤務だったヒロコさんと、薬剤師だったノリコさんは、11月以降、肺炎や腎盂腎炎になり熱が出て体調の悪い時期もありましたが、回復されて今はお元気です。みなさんが来てくださった日の夜は、お二人とも良く眠られました。きっと、自分達の想いを拾い上げて下さって、安心されたのかもしれない。



## 関東での<とつとつダンス>ワークショップ

<とつとつダンス>の活動をどのように広め伝えるか、継続していくか。これを念頭に、今年度は海外で複数のアーティストにワークショップに参加してもらった。また国内では東京で7月に、一般参加者とアーティストに向けたワークショップを実施。9月には、同ワークショップに参加した二名(西岡と大迫)が見学者として同行し、サービス付き高齢者住宅において利用者の方々、施設職員とワークショップを実施した。この二名は、翌年1月の大阪でのパフォーマンス公演にも参加した。

### <とつとつダンス> ワークショップin東京

日時 2024年7月21日(日)  
10:30～12:00(一般参加者)、  
13:00～14:30(アーティスト)

会場 ノアスタジオ吉祥寺

進行 砂連尾理、神村恵

参加人数 25名(一般参加者)、20名(アーティスト)



一般参加者向けワークショップでは、<とつとつダンス>に関心のある方々にその一端を体験していただく機会となった。アーティスト向けワークショップでは、より深く<とつとつダンス>のメソッドを共有し、それぞれの背景に沿って、そのメソッドを幅広く展開できるかどうかを参加者とともに問う時間となった。

### <とつとつダンス> ワークショップin新小平

日時 2024年9月17日(火) 14:00～16:00

会場 新小平駅近郊のサービス付き高齢者住宅

参加アーティスト 砂連尾理、神村恵、  
西岡樹里、大迫健司

参加人数 20名



砂連尾、神村に加え、「<とつとつダンス>ワークショップin東京」の参加者から大迫(ダンサー・俳優)と、過去に砂連尾の公演に参加した西岡(ダンサー)も加わり、4名でファシリテーションを行った。新規の2名は初めて高齢者とともにワークショップをする機会となった。

# パフォーマンス公演 in 大阪

日 時 2025年1月25日(土)  
 ① 14:00開演 ② 18:00開演  
 2025年1月26日(日) ③ 14:00開演  
 会 場 アートエリアB1(大阪市)  
 出 演 砂連尾 理(ダンサー・振付家)、  
 神村 恵(ダンサー・振付家)、西岡樹里(ダンサー)、  
 大迫健司(ダンサー・俳優)、石田智哉(映画監督)ほか  
 来場者数 185名

今年度は、関東だけでなく関西でも<とつとつダンス>の“今”を伝えようと、アートエリアB1で公演を行った。ワークショップや滞在制作での経験を重ね新たにダンサーとしてチームに加わった大迫と西岡、そして映画監督の石田も舞台にあがり、砂連尾や神村とともにクリエイションに参加。砂連尾たちがワークショップを通じて体感している<とつとつダンス>が表現された。

公演では、マレーシアと大阪の会場を繋いで行われたワークショップや、今は亡きかつてのワークショップ参加者と砂連尾のやりとりを、当時を知らない大迫と西岡が“再現”するシーン、石田が彼の視点から観察した<とつとつダンス>を、自身の経験と感覚を踏まえ考察したテキストを朗読するシーンも。

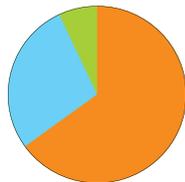
会場には<とつとつダンス>を開始当初から知る観客が多く訪れたこともあり、上演後もその変遷を語り合う姿が多く見られた。

## アンケート結果

来場者へのアンケート結果は次の通り(回答数46名)

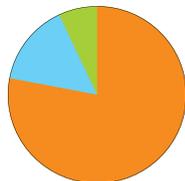
● これまでに<とつとつダンス>に参加されたことはありますか？

■ はじめて 30  
 ■ あり 15  
 ■ 未記入 3 (名)



● 公演はいかがでしたか？

■ とてもよかった 36  
 ■ よかった 7  
 ■ 未記入 3 (名)



1・2・3 写真:草本利恵 / 4・5 写真:torindo

## 2024年度<とつとつダンス>活動記録上映&トーク

日 時 2025年2月15日(土)16日(日)

会 場 水性 -susei- (東京都中野区)

来場者数 108名

会場では、今年度、日本、マレーシア、シンガポールの認知症者、介護者、アーティストたちと繰り広げてきたダンスワークショップの様子を記録した映像作品を上映。また、関係者によるトークイベントを実施した。アートやダンスに関心のある方々を中心に、関東近郊で福祉や介護に関わる方にも多く足を運んでいただいた。トーク中の来場者からの質問やトーク後の会話も尽きず、関心の高さが伺えた。



撮影：久保田テツ

登壇者の詳細はこちら →

(<https://torindo.net/news/2024report/>)



### ●これまでの活動に関する映像記録 (会場上映)

- ① 鹿児島での活動記録 (2024、撮影編集/遠藤幹大)
- ② シンガポールでの活動記録 (2024、撮影編集/久保田テツ)
- ③ マレーシアでの活動記録 (2025、撮影編集/久保田テツ)
- ④ 「<とつとつダンス>パフォーマンス公演 in大阪」の映像記録 (2025、撮影編集/遠藤幹大)

### ●トークセッション 2024年度の活動報告

(① [P.08-09] [P.18-19]、④ [P.06] は本報告書に編集版を掲載)

- ① <とつとつダンス> (2009～2025) その始まりから現在まで  
登壇者 砂連尾理 (ダンサー・振付家)、久保田テツ (映像作家)、  
遠藤幹大 (映画監督)
- ② 「パフォーマンス公演 in大阪」(2025)に参加して  
登壇者 神村恵 (ダンサー・振付家)、大迫健司 (ダンサー・俳優)、  
西岡樹里 (ダンサー)
- ③ シンガポールでの取組 ～パフォーマーとして感じたこと～  
登壇者 砂連尾理、  
マイケル・チェン (俳優・パフォーマー ※オンライン)
- ④ マレーシアでの取組 ～活動3年目を迎えて～  
登壇者 砂連尾理、  
セシリア・チャン (高齢学者・コーディネーター ※オンライン)



記録映像  
(日本語字幕、手話通訳付き)



記録映像  
(日本語字幕、手話通訳付き)



記録映像  
(日本語/英語字幕)



記録映像  
(日本語/英語字幕)

①～④聞き手：豊平豪 (torindo)

## それぞれの視点からみた<とつとつダンス>

今年度の<とつとつダンス>では、砂連尾や神村を中心とする振付家・ダンサーだけでなく、若手ダンサーや俳優、映画監督、医療関係者など、国内外からもさまざまな立場に関わっていただいた。この章では、それぞれからみた・感じた<とつとつダンス>の印象について、エッセイやインタビューを通して紹介する。

### (1) エッセイ 『いらない/ほしくない』 の向こうへ

個人的に、非常に興味深い経験でした。私たちが通常頼る言葉や言語の枠を超え、体の動きや声を使って、境界のない、制約のない自由な方法でつながることができるという新たな視点を得ることができました。

また、父の最期の数ヶ月を思い出しました。父が最もよく使っていた言葉は「mai “マイ”」です。「いらない/欲しくない」という意味ですが、父が本当にそれを意味していたかどうかはわかりません。ほとんどの日、父は会話に集中する能力を失っており、私たちは父が本当に望むことや意図を推測する必要があり、それには非常に多くの努力が必要でした。双方にとって大きなフラストレーションがあり、効果的なコミュニケーションはほとんど不可能でした。

<とつとつダンス>は、認知症や言語障害、認知障害のある人たちとつながり、コミュニケーションを可能とするための強力なツールと言えるでしょう。

「マレーシア・バガン病院での医療関係者に向けたワークショップ」後のSNSより引用

ホイリン・タン博士

(バガン病院 マネージング・ディレクター)



## (2) エッセイ

### 大阪舞台公演から 持ち帰ったこと

#### —— 触れられる体と特徴的な 身体で舞台にあがること

映画監督で車椅子ユーザーの石田智哉は、2022年に記録映像のディレクター等として参加したことをきっかけに、<とつとつダンス>に並走している。今年度は演者として、「<とつとつダンス>パフォーマンス公演in大阪」に出演してもらった。

電動車椅子から降りて全身で床に触れた初舞台から数え、三回目の砂連尾理さんの舞台出演となる(※1)。今回は4人のダンサーがこれまでの<とつとつダンス>から受けとったものを、とりわけ「触れる」ことを軸としながら舞台上に立ち上げていた。ここでは稽古から公演に参加することで考えたことを二つ。

砂連尾さんが「認知症者がいないと、彼ら彼女らとやっていることは出せない」と言っていた。確かに今回の舞台は触れる上での速度、力のかけ方、回数と認知症者とその介助者で行っているワークショップのときは明らかに違った。神村恵さんが2022年の砂連尾ゼミ生も参加していた<とつとつダンス>オンラインワークショップのときに「動きの速度を緩めることもまたテクニックですね」と話していたことを思い出した。今回は(冒頭のオンラインおよび映像を除いて)舞台上に認知症者やその介助者は「いない」。けれどもしばしば「いる」かのようで、これまで出会った方と舞台を共にしている気がする不思議な時間が流れていた。

稽古中、「触れられる側」からの言葉を紡ぐことについて投げかけられた。自分はどちらかと言えば「触れ」にいくよりも「触れられる」ことが多い。とっかかりに日々の動作を振り返ってみると手と手、足と足といった同じ身体部位よりも、腰と手、腕と手といった異なる身体部位による接触が多いことに気づいた。生活のサポート(排泄、更衣等)を完了すること以外に「触れられる」という行為が生んでいることとは何だろうか。

舞台の1シーンに西岡樹里さんが神村さんの手を使って自身や神村さんの体を確かめるように執拗に触る振る舞いがあった。手を体に押しつける、叩く、力を込めてなぞる。会場に響く音にも驚く。このとき重なった出来事は車椅子から布団へと移動するときの手の感触だっ

た。空気の乾燥具合、お風呂上がり、体の疲労感といった複数の条件の重なりがあるが、触れる手のわずかな角度の違いによって触れられる皮膚(腰、膝等)が切り裂かれるときがある。

どちらかと言えば、介助者の手のプニプニとした肉よりもゴツゴツとした骨があたる。そこに力が加わると大抵、切り傷ができる。その傷は気づかずに生まれていることも多い。このことが起きる人と起きない人がいて、こちらでも分かりかねている。手とは一口に言ってもその人がこれまでどのような仕事をしてその手を形作ってきたのか(さらには、動きの癖)で十人十色であることを実感する。

今回の舞台は<とつとつダンス>オンラインワークショップについて綴ったエッセイを朗読すること、舞台パフォーマンスの一場面を撮影することを通じて出演した。「朗読者」、「撮影者」という役での参加は特徴的な身体を持つ人——得手して社会的弱者と語られがちな人——が舞台に出演することにおける別の可能性をトライアルすることのように思える。特徴的な身体を持つ人が舞台にあがり「自己表現」を行うことで、自分の可能性や「肯定」するきっかけを得られる意味で、こうした作品がさまざまな場所で生まれてほしいと切に願っている。ただ同時に、彼ら彼女らが舞台にあがることで「自己肯定感」や「共生社会」を得られ、素晴らしいという綺麗なまとめ方で満足するだけでよいのだろうかという思いも抱く。

では、こういった形で彼ら彼女らとの作品を作ればいいのかと問われると、明快に答えられるわけではないし、その道のりの困難さは十分承知である——課題は山積である。まず介助者を確保して継続的な稽古(クリエーション)をする環境を作ることがかなり険しい——。こうした制作環境面の指摘についてはここでとどめるが、特徴的な身体を見せることで終わらない舞台は支援者、関係者ととどまらない観客を生むことにも繋がるだろう。

朗読することが4人のダンサーに何か動きを与えていること。撮影することがそこで起きていることをどの位置からみたいのかを見せることに関わっていること。このように特徴的な身体を見せることのみを役割として舞台に出演していないことを実感できる舞台公演に関わった喜びは大きい。

(※1) 振付、演出、砂連尾理(2019「Metamorphose——カフカの“変身”から考える生のゆらぎ」)に出演した。

石田智哉(映画監督)

(3) 鼎談  
〈とつとつダンス〉  
ワークショップと  
パフォーマンスに参加して

2023年度から〈とつとつダンス〉を他のアーティストたちと共有する試みを行っている。今年度は2022年度から〈とつとつダンス〉に並走しているダンサー・振付家の神村恵に加え、西岡樹里、大迫健司の二名のダンサーも、ワークショップや大阪でのパフォーマンス公演に参加した。三人に今年度の〈とつとつダンス〉での活動について伺った。

● 〈とつとつダンス〉との関わりは？

神 村 最初に参加したのが、2022年。〈とつとつダンス〉がマレーシアに初めて訪問した年です。渡航前に現地の方と一緒に何回かオンラインでワークショップをして、そのあとマレーシアに行ってたくさんの場所を訪問しました。認知症の方、ケアに関わる人、介護そのものに関心がある方など、色々な立場の方と一緒にワークショップをしました。それまでの国内での長きにわたる試みの積み重ねについてはわからないまま、現場に携わる中で徐々に知っていったという感じです。まだまだ自分が〈とつとつダンス〉の一端を担っているみたいな実感はありませんね。

西 岡 私は2024年の秋からです。元々は関西に住んでいて、今から十数年前、私が学生の頃に先生としての砂連尾さんにお会いしています。私が今秋、関東に引っ越したときに、ワークショップの見学にお誘いいただいて、初めて〈とつとつダンス〉の現場に参加しました。そこから制作チームやダンサーの皆さんと一緒に鹿児島に訪問し、その地域に住む高齢者の方たちと関わったという経緯があります。大阪の公演にも出演しましたね。まだ短い期間なので〈とつとつダンス〉を手探りで体感しているところです。

大 迫 自分は、俳優を入りにパフォーマンスに関わるようになりました。〈とつとつダンス〉には2024年の9月に西岡さんと一緒に東京・新小平のサービス付き高齢者住宅に行かせてもらったのが最初です。参加者に混じってワークショップを体験することができました。その距離感で大阪の公演に出演しました。公演のクリエイションを経て、砂連尾さんの言葉や考えていることをちょっとずつ知りつつあります。ときおり、神村さんが、砂連尾さん以上に砂連尾さんのことを知っているよう気がしました。

● 〈とつとつダンス〉と

関わっていく中で、印象に残っていることはありますか？

神 村 砂連尾さんはワークショップのルールを一応は決めますが、場の雰囲気と参加者に合わせて、ぱっとやることを出していきます。こっちはルールに合わせて真面目にやるんですが、砂連尾さん本人が一番最初に違うことを始めることが多々あるんです。

でも、確かにそうだよなあ、と。ワークをきっかけにして、その場に居合わせた人とインタラクションを起こしたいのであって、上手い展開をすとか、自分が決めたルールを最後まで徹底してやらなきゃいけない、なんてことはないんです。そこに毎回はっとさせられます。

西 岡 鹿児島で、ホームホスピス「あんまあの家」の入居者である女性と踊る機会がありました。ずっと車椅子に座ったままで、手が机の上をずっと繰り返し、右に行ったり、左に行ったり。私はその動きに合わせていったんです。それに引き込まれるというか、その先ももっと見てみたいとかという気持ちになっていきました。それが生々しく印象に残っています。記録映像を見ても懐かしいなって思わないんです。すぐ感覚が戻ってくるような。その人がそこにいて、私がそこにいたすぐ濃密な時間にぼんと戻ってしまうんです。

大 迫 一つは舞台のクリエイションで車椅子

ユーザーの映画監督の石田智哉さんと一緒にした。電動椅子を使う方と関わるのは初めてでした。いざ、石田さんを目の前にすると、どう接したらいいか正直戸惑ってしまって。石田さんと私がちょっと踊ったときに石田さんの手に触れたんですが、今まで私が触れたことのない指の感触を感じて。皮膚の柔らかさ、はかなさ、頼りなさみたいなものもありつつ、でも何かを伝えてくれる触れ方が初めての経験でした。その日の帰りの電車でなぜか一人で泣いたのはすごく覚えています。



左から、豊平(聞き手)、神村、西岡、大迫

---

●みなさんは現時点で  
〈とつとつダンス〉とはどういうもの  
だと考えていますか？

---

神村 改めて映像を見て思ったのですが、いろんな人がいろんな思いで関わって存続していること自体が〈とつとつダンス〉の一番おもしろいところ。介護とも、単純なダンスのアートとも言えない。現象そのものを〈とつとつダンス〉と呼んで、おもしろがり観察し、関わりたい人を増やしていく方向でもいいように思います。

西岡 公演の中で大迫さんと私が二人で「砂連尾さん」と高齢者の「みゆきさん」とのやり取りを演じるシーンがあります、このとき参照した記録映像が、久保田テツさんが2013年に撮った作品です(※p.8の鼎談参照)。砂連尾さんにこの映像を渡されて、大迫さんは「砂連尾」になって、西岡さんは「みゆきさん」になって

くれって言われたんですけど、これはとんでもないことだなと思いました。ここにもいない、会ったこともない、触れたこともない、話したこともない。ただ映像に残っているものだけを見て、私たちはこれにどう応えていくんだと。それで、とにかくその映像を繰り返し、繰り返し見ました。砂連尾さんがみゆきさんの動きを引き出しているシーンもありながら、みゆきさんの方がぐっと二人の間の壁を開く瞬間みたいに感じるところもあって。みゆきさんが壁を開いて砂連尾さんを受け入れたなって思った瞬間に二人の距離がぐらりと揺れたような感じがしたんです。それが〈とつとつダンス〉なのかなって今は思っています。

大迫 砂連尾さんをはじめとして、十数年これに関わってこられた方々がいるのが、大きなポイントだと思っているんです。身体で対峙するという意味で大きな部分を担っているのは砂連尾さんかもしれないけれど、いろんな方がそれぞれの興味と、これがやっぱり必要だよってという意識を持ち寄って、〈とつとつダンス〉を続けている。誰と接する際にもベースになる部分に常に立ち戻っている。私も含めて、認知症や障害に関して当事者性が薄い人にとっては怖かったり、関わりにくい部分もあると思うんですが、パフォーマンスという形も使いながらエモーショナルな部分を回避してアプローチしています。そこは自分にとっては魅力的です。

インタビュー実施日:2025年2月15日(土) 水性-suisei-にて  
撮影:久保田テツ

(4) エッセイ  
〈とつとつダンス〉  
雑感

一体どういう経緯をもって〈とつとつダンス〉と名付けられたのかを、ぼくはまったく知らない。ただ〈とつとつダンス〉と付き合い始めて15年の歳月が流れ、もはや、別の呼び名は思いもつかない。

〈とつとつダンス〉の重要なメンバーである伊達伸明が偶然にもものにしたと言われる『とつとつな音』という詩がある。伊達は美術家だが、〈とつとつダンス〉の2010年と2014年の公演にはウクレレ奏者として参加した。彼は詩の中で「未整理の過去と手さぐりの未来の間に点描でしか描けない現在がある。それを描く音、とつとつ」と表現した。とつとつの辞書的な意味は「口ごもりながら話すさま」であるが、これよりも伊達の説明の方が段違いにじっくりとくる。伊達が舞鶴の赤煉瓦倉庫での2010年の初公演『とつとつダンス』でつま弾いた「黄昏のビギン」のように胸の深いところまでしみこんでくる。ぼくはといえば、15年間の未整理な過去に点滅する思い出のかけらを拾い集めることばを綴るしかない。

はじめて砂連尾理というダンサーに出会ったのは2010年3月7日の『とつとつダンス』の公演であった。ぼくは元看護師で臨床哲学を志し認知症ケアを研究する者として、公演後のアフタートークの出席者として招待されていた。『とつとつダンス』が、京都府舞鶴市にある特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるでのダンスワークショップの成果発表として企画され認知症の入居者が出演するというので、ぼくが認知症ケアの専門家として意見を求められる格好であった。ダンスに関してはほぼ無縁な自分であったにもかかわらず依頼を引き受けたのは認知症の理解についてはそれ

なりの自負があったからだ。非言語的コミュニケーションの可能性についても考えるところがあり、何かしらのコメントはできるだろうと、高をくくっていた。しかし、公演で目にしたのは、想像を超える世界で、認知症ケアの常識やぼく自身の半端なケア観を吹き飛ばすものであった。アフタートークで何を話したのかは、もう覚えていない。ただ、砂連尾のダンスの秘密を知りたいという気持ちだけが募っていた。

舞鶴での出会いの後、しばらくして砂連尾が伊丹のホールでワークショップの発表会をするという情報を手に入れた。この発表会で彼は伊丹市内で拾い集めたゴミの入ったビニール袋と踊るという荒技を見せる。そのときに、ぼくは彼を追いかけようところに決めたのだった。グレイスヴィルまいづるの施設長である淡路由紀子さんに頼み込んで、砂連尾さんのワークショップに参加する許可を得たぼくは〈とつとつダンス〉の現場へと参入することになる。

そのうちにワークショップの後で、哲学カフェ風の対話の進行役を務めることになり、〈とつとつダンス〉へ深入りをこころみる。以降、身体コミュニケーションの研究に協力してもらったり、宮古島やメキシコへの調査旅行を共にしたりと砂連尾との関係は広がっていく。いつのまにか〈とつとつダンス〉は、ダンス公演のタイトル名から脱皮して砂連尾を核として変化成長する活動の代名詞になった。2014年のダンス公演『とつとつダンス part2 愛のレッスン』では、ぼくは観客の立場から制作メンバーの一人にまでなった。

この15年、ぼくの人生から〈とつとつダンス〉を抜きにはできない。竜巻に巻き込まれた者には、その竜巻の姿を見ることはできないのと同様に、ぼくにも冷静に〈とつとつダンス〉を語る言葉を持っていない。口ごもるしかないのだ。それでも、伝えたいことはある。

とはいえ、これまで、ぼくが〈とつとつダンス〉について話したこと、書いてきたことは砂連尾が主役でありすぎたと反省している。今

回、改めて考えてみて、砂連尾は徹底してデュオのダンサーであることに気づいた。たとえ舞台の上に彼が一人であっても、不在の誰かとの、もしくは何かとのデュオ・ダンスに違いはない。

豪腕で速球や変化球を投げる投手には注目が集まるが、その球をしっかりと受け止める捕手の存在は忘れられることが多い。〈とつとつダンス〉においても、砂連尾だけに関心が集中する傾向がある。ケアの文脈においても、ケアされる側のことは解決すべき問題として棚上げされ、ケアする側の問題解決の手際だけが注目されがちである。認知症と呼ばれる老人の失敗は隠しても暴かれるが、老人の努力や工夫は見えにくく、ないもの扱いにされてしまう。

砂連尾がゆっくりと手を差し伸べると、それを見る者は差し伸べた手に目的を読み取ろうとする。けれど、砂連尾の手は、ふと動きを止める。彼は待つ。相手から動きが生まれるのを待つ。待つということさえ忘れたようにして待つ。佇む彼に向かってダンスが立ち上がり、私のダンスでもなく、あなたのダンスでもない私たちのダンスがはじまっている。

時の流れに乗ることが不自由な人も、「いま・ここ」にあることで誘いに身をまかせる。即興ダンスはとつとつと繰り返される。目的地のない動きに終わりはない。反復は惰性ではなく、瞬時瞬時の新たな始まりである。繰り返しは倦怠ではなく充実を生み出す。

デュオのダンスはどのようにしてはじまるのだろうか。私のダンスでもなくあなたのダンスでもないとは、どういうことなのだろうか。互いの「目が合う」ところからダンスを考えてみる。「目が合う」とは、それぞれの目が、相手を見る目であると同時に相手から見られる目ではなくてはならない。「見る」という能動と「見られる」という受動が同時に、両方に、起きなければ目が合うことはない。この場合、両者とも「見る」は自分でコントロールできたとしても、「見

られる」という受動に関しては自分のコントロールがきかない、相手次第の状況になる。つまり、目を合わすということをどちらか一方が特権的にコントロールできないということだ。「目が合う」という二人の接触は、各自の能力を越えたところからそれぞれに奇跡のように訪れるしかない。そして、この奇跡が私たちの「目が合う」という経験になる。

砂連尾は「世界はロゴスで満たされてはいない」と語る。だとすれば、その空隙はどこにあるのだろう。それは、未知なる世界の果てではなく、私とあなたの中に潜んでいる気がするのだ。

---

西川 勝(臨床哲学)

## おわりに

### <とつとつダンス>2024から見えてきたこと

<とつとつダンス>はその日にたまたま出会った高齢者との間で展開されるダンスです。彼らと向き合ったその瞬間は、目を合わせたものか、どれくらいの距離を取ったものか、そしてどうしたら触れ合うことができるのか、この活動を始めて何年にもなりますが未だ慣れることはなく、それこそ毎回、逡巡しながらとつとつとその関係を探っています。

力を抜き、息を合わせ、心地良い距離感を探しながら、恐る恐る目を合わせ、手を差し伸べる、差し出したその手に相手が触れてくれるかどうかは分かりません。また、直接、手と手、指と指が触れ合うことだけが目的でもなければ、そこがダンスの終着点でもありません。たまたまその日にあったその偶然性の中に身を投げ、触れ返してくれるかどうか分からない不確かな関係に身を置きながら、目の前の相手を自分のペースに巻き込むことなく、また相手の空気に安易に乗り合わせることもせず、そこに開かれている、いや、そうすることで反転してくる自己と他、またそこから繋がる、今まで関わった人たちとの経験から否応なく感じさせられる生と死に向き合いながら、当て所もなく二人の間に発生するダンスの行方を探り合います。それは<とつとつダンス>ならではだと思えます。

そんな偶然の点と点で始まった関係が触れ合おうとすること、また接触することで描かれる、とつとつとした線。その一ラインーラインの過程で私は自分自身と出会い直し、また偶然に出合ってしまった私たちという関係を創り、そして関係を終えた後も続く手触り、消えない痕跡、軌跡をトレースしながら人と出会い生きるということ、その根源的な意味を探し、問い続けることが<とつとつダンス>なのかなと、近頃、そんな風に思っています。

---

砂連尾 理 (ダンサー／振付家)

●参加アーティスト

砂連尾 理、神村 恵、西岡樹里、  
大迫健司、石田智哉、ジェイミー・ブイテラー、  
アリソン・タン・ユーヤング、  
キンバリー・ロング、クリシュナ・ガンパティ、  
マイケル・チェン

●映像制作・撮影・編集

遠藤幹大、久保田テツ

●写真撮影

草本利恵、久保田テツ、torindo

●チラシデザイン

垣内 晴

●翻訳

石居 萌、久米明子

●ワークショップ・コーディネーター

久貝京子、セシリア・チャン(マレーシア)、  
オードリー・ペレラ(シンガポール)、  
堤 玲子、豊平さとみ(鹿児島)

●協力

西川 勝

特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづる

立教大学現代心理学部映像身体学科

バガン病院(高齢者ケアセンター)

ココナッツクラブ

THK アクティブ・エイジング・ケア・センター

Aliwai Arts Center

Dementia Singapore、Dementia & Co.

LL さねかた、ホームホスピスあんまあの家

妙行寺、水性-suisai-

一般社団法人アートエリアビーワン

NPO 法人 DANCE BOX

●制作統括

豊平 豪

●制作

横田紗世、和田真文

●広報

関 萌美

●主催

文化庁、一般社団法人 torindo

●関連リンク

---

一般社団法人 torindo

ホームページ

<https://torindo.net/>



---

一般社団法人 torindo

Facebook ページ

<https://www.facebook.com/torindo21>



---

とつとつマガジン (note)

[https://note.com/totsutotsu\\_dance](https://note.com/totsutotsu_dance)



---

<とつとつダンス>YouTube ページ

[https://www.youtube.com/](https://www.youtube.com/@totsu-totsudance9801)

@totsu-totsudance9801



---

砂連尾 理 ホームページ

<https://www.jareo-osamu.com/>



---

<とつとつダンス> 2024年度活動報告書

発行日  
2025年3月25日

発行  
一般社団法人 torindo

編集  
豊平 豪、和田真文、横田紗世

デザイン  
垣内 晴

---

文化庁委託事業「令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業」  
『日本⇄アジア太平洋国際交流事業～認知症者・高齢者と介護者をつくる  
「アートのような、ケアのような《とつとつダンス》』』



torindo



